

山奥で進む壮大な 税金浪費

ルボライター
滝川康治

優れた自然環境を破壊する無駄な公共事業の見直しを

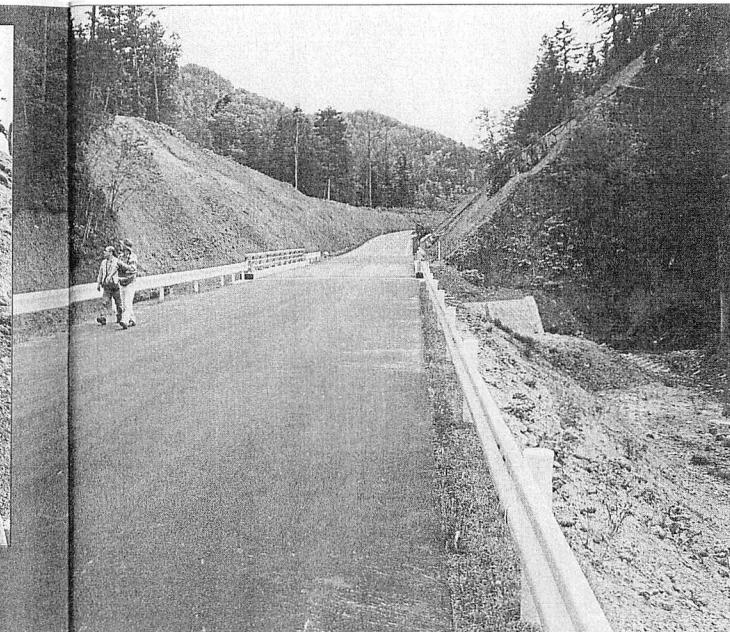
ボネズミ」と呼んでいたらしい。わたしが訪れた場所は、置戸・阿寒線の予定ルートのすぐそばで、このまま工事が進むと生息地を直撃する。置戸・阿寒線の足寄地区では、既存の林道を拡幅する形で工事が進められる。このあたりは地滑り地帯が多く、

林業振興のためと言つが…

沿線の自治体は大規模林道をどう捉えているのか——滝雄・厚和線の起点にある、総面積の八九%を森林で占める滝上町で、山口恒雄町長に聞いてみた。五月に斜里町で開かれた「環境自治体会議」のなかで、パネリストにな

った山口町長が、「森林や林業を『環境資源』として捉えて、今まで以上に養つていかなければならぬ。そのため森林交付税を導入する運動をしていられる」と力説する姿が、印象深かつたからである。

沿線四町村でつくる「北見地域大規



山の中に忽然と現れる大規模林道は2車線の舗装道路(丸瀬布町内で)。地盤がもろく、あちこちで法面(斜面)がずり落ちてきている(左)

はまだ十年以上かかりそうだ。
ルート沿いの地質は北海道の背骨に
ある「日高層」が多く、もろくて崩
れやすい。補強した法面がずり落ちた
箇所が、いたるところに見える。
「日高層の岩石は割れやすい。所によ
りの住まいの山奥に、二車線、幅員七メ
ートルの舗装道路が延びる。他の車は
全く通らない。着工から十七年にして
ようやく四〇%台の進捗率で、この先
トンネル工事もあるので、完成までに

まだ二十年かかる」と、山口町長は言つた。
「地滑りを起こす可能性があります」
参加者の一人で地質学者の八木健三
さん(北大名譽教授)が、地盤の特性
をこう解説してみせた。

周囲の国有林は伐採を終えたところ
が目立ち、今さら大がかりな林道をつ
ける意義が希薄なように映る。沢を埋
めたところには、直径九十センチほど
の排水管を埋設してあるが、大雨のときには呑み込まれるのだろうか。

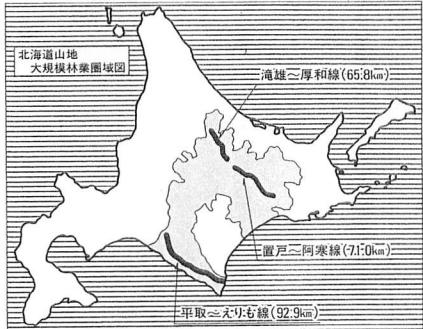
丸瀬布町内では、既存の林道を切り
取つて、そこに二車線の舗装道路がぶ
ち抜かれていた。「今までの林道で十分
作業ができるのに…」という声が参加
者から上がつた。

置戸町中山地区、常呂川の支流筋の
岩場にナキウサギの生息地があつた。
氷河時代から生き延びてきたナキウサ
ギは、置戸町で初めて生息が確認され
た経緯がある。地元の人たちは「ゴン
度のものがあつた方がいい」と、大規模林道の必要性を強調した。

協議会は三路線ごとにあって、毎年、
関係機関に早期建設を陳情しているの
だという。町長の言う「環境資源」には、林道開設で失われる豊かな自然は
含まれないらしい。

大規模林道は完成区間ごとに地元自
治体に移管(滝雄・厚和線も一部が移
管済み)されることになつており、維
持管理費は地元負担となる。山口町長
は、「その面はまだ具体的に話をする段
階になつていない。交通量が少ないの
で管理面では心配していない」と、隨
道もまた、これまで建設促進の姿勢
で臨んできた。

「地元の要望が強いので、今までどおり対応する。反対する人たちの指摘す
る問題があるなら、アセスメントの結
果を踏まえて、環境に配慮した線形が



森林開発事業団による大規模林道事業が道内の3つの路線で続いている。ナキウサギなどが生息する優れた自然環境を損ない、災害の危険性をはらみながら進むこの事業は、壮大な税金の無駄遣いで林業振興につながらないのではないか。現地見学や関係者の話を交えて検証する。

ナキウサギの生息地も直撃

五月から六月にかけて、自然保護団体が企画した大規模林道の現地視察があり、わたしも同行させてもらつた。後出の「全国ネットワークの集い」に向けて、大規模林道の現状やルート周辺の自然環境を把握するのが、この視察の目的である。

国道273号線に平行する形でルート

が設定されている、「滝雄・厚和線」の滝上町→白瀧村の区間は、国有林を切り開きながら工事が進んでいた。人の住まいの山奥に、二車線、幅員七メートルの舗装道路が延びる。他の車は全く通らない。着工から十七年にしてようやく四〇%台の進捗率で、この先トンネル工事もあるので、完成までに

トが設定されている、「滝雄・厚和線」の滝上町→白瀧村の区間は、国有林を切り開きながら工事が進んでいた。人の住まいの山奥に、二車線、幅員七メートルの舗装道路が延びる。他の車は全く通らない。着工から十七年にしてようやく四〇%台の進捗率で、この先トンネル工事もあるので、完成までに

トが設定されている、「滝雄・厚和線」の滝上町→白瀧村の区間は、国有林を切り開きながら工事が進んでいた。人の住まいの山奥に、二車線、幅員七メートルの舗装道路が延びる。他の車は全く通らない。着工から十七年にしてようやく四〇%台の進捗率で、この先トンネル工事もあるので、完成までに

とられると思う。道としては、公團に環境への配慮を要望していくが、計画の見直しを求める考えはない」(林務部森林計画課の佐々木泰謙長補佐)と語り、「税金の無駄遣い事業」の批判を気にとめる様子はなかった。

奥地を走っているために、大規模林道が地元住民の話題にのぼることは少ない。「山歩きや釣りをする人以外には縁のない道路」と言う沿線住民の話を聞いた。

沿線のある林業経営者は、「道が良くなることは歓迎する」としながらも、こんな疑問を投げかける。

「今の林道工事の補助基準では、四メートル幅で砂利を入れないと金がつかない。現実には、山元が年に数回山に入るためだけの林道なんだ。大規模林道ができるのも、決して今の林業界の力なんだから、別な形でお金が使えないようになれば、ああいう道路は必要ないし、もつといい山ができる」これが現実なのだろう。大規模林道というハード事業だけが突出した姿はいびつであり、本来の林業振興にはほど遠いようだ。

促進の陳情活動などを続けてきたが、ルートが人目につかない山奥にあり、一年間に数百メートルから三キロ台が建設されるだけの遅々とした進捗状況などから、道民の大きな関心を呼ぶことはなかった。一服状態だった北海道の大規模林道問題が再燃してきたのは、一昨年の置戸・阿寒線着工のころからである。

林道事業の開始から二十数年、「大規模林業圏」の位置づけは相変わらず不透明なままである。

林道網の整備によって、「大規模な造林や特用樹の育成」や「木材や特殊林産物の加工、流通団地の造成」をしたた餅である。工事主体の森林開発公団北海道地方建設部は、「わたしたちは林道のごく一部を造つており、事業目的にはタッチしていない」(西尾隆三部長)と「工事屋」であることを強調し、二百三十五億円近い負担金を支払うことになっている道林務部もまた、「構想は国でつくっているので、我々

色あせた大規模林業圏構想

大規模林道計画の起りは、六〇年代末の新全国総合開発計画(新全総)の一環として策定された「大規模林業圏開発構想」にまでさかのぼる。

この構想の目的は、「低利利用の広葉樹林が広範に分布する地帯を開発し、生産性の高い造林地に転換するとともに、森林レクリエーション地域振興を図る」

というもので、全国七ヵ所の大規模林業圏を設定して、二十九路線、総延



置戸町内のナキウサギ(円内)生息地。すぐ脇を大規模林道が走る予定だ



周囲には伐採された山も見える(滝上町内で)

人と森を結ぶ林道こそ必要

豊かな自然を大規模林道から守り、住民のための地域振興のあり方を考えよう」という趣旨の全国集会が七月六日、旭川市内で開かれた。

「ナキウサギは語る」をテーマに記念講演を行なったのは、大阪市立大学助教授(生物学)の川道武男さんだ。

大陸と陸続きだった氷河期に北海道にやがてナキウサギは、氷河期が終わると暖かい気候を避けて山に登つた。それが現在のエゾナキウサギだ。大雪・十勝山系と日高山脈、夕張山塊、北見山地やその周辺に生息しており、大規模林道はすべての生息地の近くを通過することになる。

「今さら林業のための道路を開通させることの必然性は全くなく、住民の生活道路

はその内容をよく承知していない。ただ、考え方生きていると思う」(森林計画課)と、あいまいな受け答えをする。この二十数年の間に林業を取り巻く環境は大きく変わった。安い輸入材に押されて国産材の価格が低迷するなかで、三兆円の累積赤字を解消するため

に林野庁が国有林を切り売りする事態が生じる一方で、自然保護や森林環境に対する関心が高まってきた。社会の変化のなかで、「大規模林業圏」の構想自体を根本から見直さなければならぬ時期を迎えているのである。

としての機能も考えられない。ナキウサギが排ガスに弱いこと、日本列島がはぐくんできた自然や北海道の財産が失われる——という認識が、地図上で林道計画の線引きをする役人にも浸透してほしい」(川道さん)

「大規模林道と地域のあした」をテーマにしたシンポジウムでは、長年にわたりこの問題を追つてきた宇都宮大学教授(森林政策学)の藤原信さんが、次のような指摘を加えた。

「森林開発公団の使命は終わつたにもかかわらず、林野庁の役人の天下りの受け皿、組織の延命策として計画が進められているのではないか。林野庁は大型機械の搬送のために大規模林道が必要」と主張するが、これから必要

取えりも線」(九十二・九キロ、一七・道東の山中を走る「置戸・阿寒線」(七十一キロ、〇・五%)の三路線

地図参照、一部は既設の公道を利用)で大規模林道の工事が進行中だ。

国庫補助金(全体の六二・七九%)と道の負担金(一六・三%)、受益者負担金(五%)で事業費を賄うことになっており、現在の試算でも三路線の合計事業費は千二百四十三億円と巨額である。

この計画が発表されるや、自然保護団体や全林野などの労組が共闘する形で反対運動が起きた。

①大規模な計画であるのに計画の実施主体が明確でない

②計画書のなかに自然保護対策が全く述べられていない

③山奥に莫大な資金を投じて道路を造るのは過剰投資ではないか

などが反対理由で、道や営林支局を交えたシンボジウムが開かれる一方、滝雄・厚和線が走る白滝村では大規模な反対デモも行なわれた。今から二十年前の話である。一方、沿線自治体の首長たちは、三路線ごとに「大規模林業圏開発推進協議会」をつくり、建設

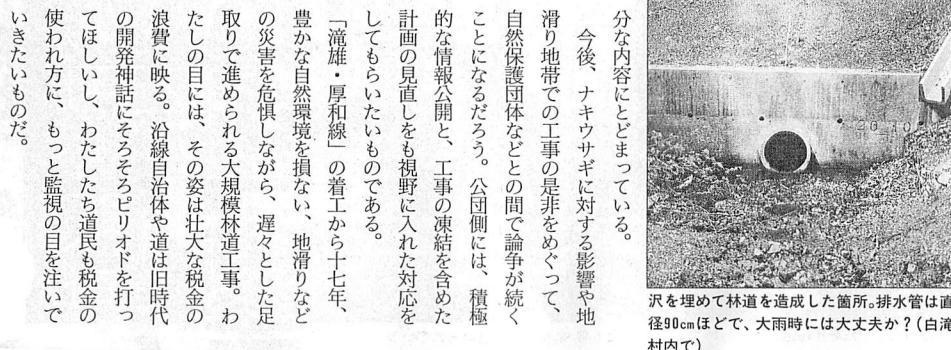
している道北の下川町の森林組合の事例を紹介しながら、「林業振興をするには、こうした手法をつくる議論をしてはどうか」と、会場の参加者に呼びかけた。

山形県内で大規模林道の反対運動を続けてきた「葉山の自然を守る会」の原敬一さんは、林道工事で破壊されているブナの森を保護し、生態系を壊すダムや林業振興につながらない既設の道路を撤去・廃止することを盛った、「緑のダム整備促進法」(仮称)の制定

提案を考えて、公共事業の新しいあり方をつくる議論をしてはどうか」と、会場の参加者に呼びかけた。



大規模林道の問題点を明らかにし
た全国集会(7月6日、旭川市内で)



も漏らす。
ナキウサギの
生息地や地滑り
地帯での林道工
事については、
「置戸のあの付
近にナキウサギ
がいることは承
知していたが、
一昨年に予定線の百メートル幅で現況
調査を行なったところ、生息地はない
だろ」との結果が出た。今後、着工
予算が認められた時点で公団独自の環
境アセスメントを実施して、生息が確
認された場合には極力路線を離すのが
好ましい、と思っている」

「置戸・阿寒線では工事が始まる時点
で詳しい地質調査を行ない、地滑り地
帶ならルートを回避するなどの対策
を取りたい」

と、路線の変更や技術的な対策を講
じる意向を示していた。

公団の環境アセスは、昨年の閣議決
定を受けて導入されたものだが、調査
項目が地形・地質・植物・動物・景観
の四つのみで、住民は調査報告書に対
して意見書を出せるだけ、という不十
二

を求める活動を紹介した。そして、「大規模林道計画は公共事業のあり方を根本的に見直さないと解決しない」と締めくくった。

さまざまな角度から大規模林道の矛
盾点が明らかにされ、あるべき林道と
公共事業の姿が浮き彫りになってきた
集会だった。

この集会を主催した「大規模林道問題
題全国ネットワーク」(代表委員・大石
武一元環境府長官ら三人)は、昨年結
成された。これまでに環境庁や林野庁
などに対して、

- ① 従来の林道やダム事業の見直し
- ② 絶滅危惧種などに影響する林道や
ダム、リゾート計画などの再検討
- ③ 広葉樹林を伐採するような林道工
事や造林政策をやめて、「緑のダム」政
策に転換する
- ④ 事業の見直しのための第三者機関
の設置や、山村・都市住民、行政、専
門家による円卓会議の開催
- などを要請しており、同ネットワー
クに対して総務庁の山口鶴男長官は、「
大規模林道について、積極的に行政
監察を行なう」と答えた、という。



置戸・阿寒線の予定ルートには地滑り箇所が多い(足寄町内で)

林道開設は公団の延命策？

批判を浴びている森林開発公団は、

全く別の目的で利用されている。こう

紀伊半島の熊野川流域と四国の剣山の

したスーパー林道に続く公団の仕事づ

くりが大規模林道だった。

現在、全国七地区に八つの地方建設

部があり、職員数は四百八十人。中曾

根内閣時代に整理対象のリストに載つ

て組織の延命を図ってきた。

わたしは道北の美深町と歌登町を結

ぶスーパー林道を知っているが、林業

振興になっている様子ではなく、夏にな

ると本州方面からやつてくるライダー

たちの格好のオフロードコースになり、

その後もスーパー林道事業などを計画

して組織の延命を図ってきた。

わたしは道北の美深町と歌登町を結

ぶスーパー林道を知っているが、林業

振興になっている様子ではなく、夏にな

ると本州方面からやつてくるライダー